



TITLE:

京都大学埋蔵文化財ニュース 2

AUTHOR(S):

京都大学埋蔵文化財研究センター

CITATION:

京都大学埋蔵文化財研究センター. 京都大学埋蔵文化財ニュース 2. 京都大学埋蔵文化財ニュース 1992, 2

ISSUE DATE:

1992-02-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/151833>

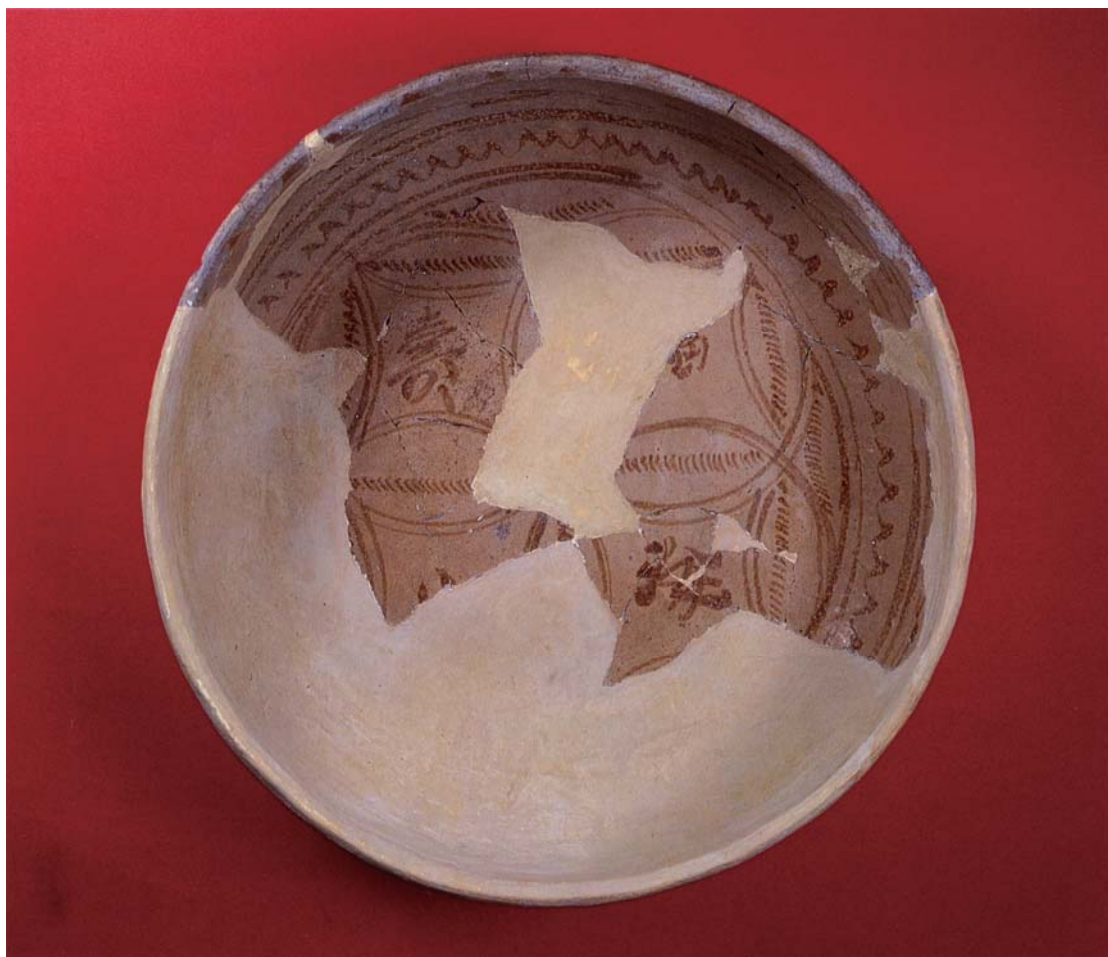
RIGHT:

京都大学埋蔵文化財ニュース 2

1992.2.20

京都大学埋蔵文化財研究センター

〒606 京都市左京区吉田本町 TEL.075-753-7691



黄釉陶器鉄絵の盤 口径34cm

1987年度に調査した本部構内の遺跡で、鎌倉時代に掘られた土坑から、中国で生産された黄釉陶器の盤が出土した。下地に黄褐色の釉を厚くかけ、口縁部と内面に鉄絵と呼ばれる茶褐色の装飾がある。文字は長寿を祝う吉祥句の「福海壽山」である。

黄釉陶器鉄絵の盤

1 黄釉陶器の盤

京都大学構内の中世遺跡を発掘すると、国産の土器や陶器とともに、はるばる海をこえて中国や朝鮮から輸入された陶磁器が出土する。これらのなかに、黄釉陶器とよばれる一群があり、1987年度に本部構内の工学部電気系校舎新営にともなう発掘調査で、13世紀後半ごろに作られた土坑から大量の土器とともに、数点の黄釉陶器盤が出土した。

表紙に示したものは最も残りがよく、口径は34cm。口縁は玉縁状をなし、体部がややふくらんだ扁平な鉢状の器形を示す。内面から体部上半に黄褐色の釉薬を厚くかけ、口縁部と内面に鉄絵と呼ばれる茶褐色の装飾がある。とくに底部には、4回の同心円を中心に交叉させ、長寿を祝う吉祥句の「福海壽山」を描いている。これは一気呵成に筆書きしたもので、製作にあたった工人の絵画的技量のほどがしのばれる。

2 黄釉陶器の生産地

これらの黄釉陶器の生産地は、中国福建省泉州の晋江县磁窰とみられ、地元泉州の海外交通史博物館の研究者によって、童子山1号窰を中心とする窰跡群の調査が、近年すすめられている。

それによれば、壺、鉢、皿、蓋、盤など各種の器形があり、盤には広い底面に草花、魚などの動植物の文様や文字の描かれたものが発見されている。また、同心円を組み合わせた幾何学的な文様をはじめ、詩歌や吉祥句の文字を書いたものも知られており、そのなかには「福海壽山」の四字のみられるものがあると報告されている。このことから、本部構内から出土した黄釉陶器は、ほぼこの泉州の磁窰で生産されたものであり、中世京都にもたらされ、13世紀の後半ごろに、この地に捨てられたものとみられる。



図1 中国の陶磁器窰



図2 日本各地出土の黄釉陶器盤（1 長野・東中村経塚，2 福岡・京ノ隈2号経塚，3 福岡・博多上呉服町，4 福岡・博多祇園町，5 福岡・博多冷泉町，6 京都・京大本部構内）縮尺 1/10

3 各種の文様とその時代

日本出土の黄釉陶器盤の代表的なものを図2に示し、底部の文様に注目してながめてみよう。まず、中央に花を描くもの（1・2）や体を丸めた龍を描くもの（3）があるが、これらは口縁が平縁の形状をなし、写実的な描き方を特徴とする。一方、先端が丸まった玉縁状の口縁をなすものには、中心の花の周囲を茎と葉が円弧状にめぐるもの（4）、中心の花から葉が四方にむかって十字形に伸びるもの（5）、さきに紹介した京大構内出土例のように4個の円弧を交叉させるもの（6）などがあり、前者にくらべて抽象的、幾何学的な文様である。

これらのうち、平縁のものは12世紀前葉には確実に存在し、玉縁口縁は、九州では12世紀中葉、京都では12世紀後葉に出現する。そして、13世紀には平縁の出土例は非常に少なくなり、玉縁口縁が主流となってゆく。12世紀中葉～後葉は漸移的な時代と考えられる。このように、黄釉陶器の鉄絵の描かれた盤は、12～13世紀を中心とする時期に中国で生産され、大量に日本に輸入された陶磁器のひとつである。また、本部構内の遺跡出土例とほぼ同じような文様構成をもつものは各地で数多く出土しているが、「福海壽山」の文字を描いている点で、類例の少ない貴重なものと考えられる。（五十川伸矢）

北白川追分町遺跡の石棒

石棒は棒状の形をした縄文時代の石製品で、祭祀や呪術にかかわる道具であったと考えられる。近畿地方では、中期末（約4000年前）に東日本から伝わって、縄文時代が終わりを告げる晩期末（約2300年前）まで使われた。

ここに紹介する石棒は、近畿地方における石棒を使う祭祀の始まりと終わりの時期のものである。縄文時代の祭祀や石棒の形のうつりかわりを探る上で、大変重要な資料である。

1は中期末の石棒で、頭部と基部が別々に見つかった。1aは頭部で、端部が笠状にふくらんでいる。1924年に藤本理三郎氏が農学部敷地で採集し、文学部考古学教室に寄贈したものであ

る。1bは基部で、農学部総合館新営にともなう1976年の発掘調査で発見された。残念なことに、中央部分が失われているが、石材などからみて同一の製品と考えられる。もとは1m前後の大型の石棒であったのだろう。

2は1972年、農学部総合館新営工事の最中に偶然発見された。全長62.7cmをはかる。両端部ともすばまった形で、断面は扁平な楕円形をしている。晩期末ごろのものと思われる。1の石棒と比較すれば、随分と形が変化していることに気付くであろう。また、この石棒は緑色片岩という石が使われている点でも注目される。この石は、付近では和歌山の紀ノ川流域などでみられるものである。交易によって運ばれてきたのだろうか。縄文人の交流の一端についても語りかける資料といえよう。（千葉豊）



図3 北白川追分町遺跡の石棒

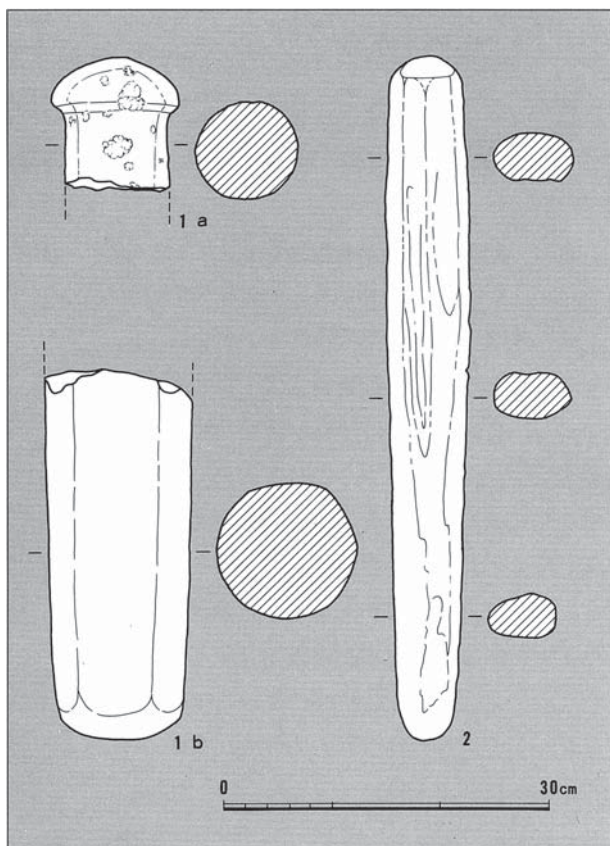


図4 石棒実測図 縮尺 1/7